

「造型 78号」の巻頭言を書くということで、自分が担任をしていた頃の「造型 61号」を見てみました（右参照）。まあなんとというか当時の「造型」らしい文章がつづられています。先日、このクラスの卒業生の何人かが校長室に尋ねて来てくれた時に、この文章を書いたのは、東大に進んだ近藤君だということがわかりました。どうりで、ふざけてはいますが、筆力のある文章です。読みながら、サル山のボス猿のような担任に対して、生徒の皆さんが遊んでくれているなあと、いまさらながら、しみじみと思いました。男子校最後の学年の3年生のクラスのもんです。バックナンバーが図書館にありました。

一方、同じ「造型 61号」には、当時の庄司恒一校長先生が次のように書いています。

かつて二高において池田潔著「自由と規律」（岩波新書）を課題図書としていたことがあった。著者が三年間経験したパブリックスクールでの生活をもとに記された半世紀以上の前の書籍であるが、教育の不易の部分は今に通じるものがあります。「精神と肉体の鍛錬」の場であると書いてあるように、学習も日常生活も厳しく、規律を守ることが求められ、スパルタ式指導、封建的とも言える上下関係のもとで鍛えられる。そして、我慢することを学び、また「質実剛健」、「ノーブレス・オブリージュ」の精神を体得するのである。何よりも自由を尊ぶイギリス人は、鍛えるべき時に心身を厳しく鍛えられることにより、一層「自由」の意味の尊さを実感することになる。教育制度は、日本と比べ複雑で違いはあるが、イギリスの良さを学びながら二高のこれからの考えたいものである。

庄司校長先生が在任していたのは、本校が、男子校から男女共学へと移行する時期でした。男子校の伝統を継承しながら、英国のパブリックスクールの教育を参考に、新たな二高のかじ取りをしていこうとする意気込みが感じられます。二高はその後、男女共学化、そして学区制が全県一学区となる中で、文武一道の伝統を堅守しながら、生徒の進学希望の高度化、多様化に対応してきました。授業課外講習そして部活動等の対応において、先生方はいへんご尽力されました。また、未来キャリア、医進会、東大セミナー、アメリカ研修、北陵グローバルゼミなど、生徒の皆さんの希望を尊重しながら、多くの新たな取り組みを創造し、先生方は、生徒の皆さんの学びを助け、そして深めてきました。この先生方の尽力に生徒が応えたその成果の一端が、昨春の大学進学の結果に顕著にあらわれています。もちろん現在は大学入試において、学校として合格者数の実績を競う時代ではありません。この点についての詳細は本校のホームページの教育方針・学校長の挨拶で非認知能力の視点から説明してあります。そして、このことは、仙台二高の「学びの現代化」として、全国的に評価されています。本年1月には9名の先生方が宮城県を代表する優秀職員として表彰されました。

さて、これからの二高を考えると、庄司校長先生の時代とはだいぶ社会の状況や、生徒・保護者の皆さんの考え方も違ってきている

ように思えます。学校管理下における安全・安心は必然であり、多様な学習ニーズへの対応や合理的配慮についても、きちんと取り入れなければいけない時代になってきております。現在では考えられませんが、あれほど大騒ぎになった二高の男女共学化への対応も、20年近く経ちそれが自然な形になってきています。そこで、生徒の皆さんの学びについて次の時代に向けて、新たなかじ取りが必要になってきていると思います。

これは、今年度の「読書感想文集」の巻頭言にも書いたことですが、近田(2024)は、高校と大学の学びの違いについて次のように述べています。

大学での学習が、高校までの勉強と大きく異なる点は、周りが与えてくれるものを吸収する学習スタイルから、問題意識をもって自発的に学習課題に取り組む姿勢が不可欠になるということです。自発的に学ぶということは、「自分の頭で考える習慣をつける」ことにほかなりません。

私自身が十数年前に大学院に再び在籍し、その後学術的な研究を続けてきていることが大きいと思うのですが、どうしても二高生の大学そして大学院での学びや生活が念頭にあります。現在教職志望の学生相手に、大学で授業を担当していることもあります。大学院での学びのレベルを上げるため、二高生には高校時代から「自発的に学ぶ」ことを少しずつでも実践してほしいと思います。大学、大学院そして社会に出て深い学びをしている先輩たちは、高校時代から「自発的に学ぶ」姿勢がありました。

現在大学の側からの次のような資質・能力の要請もなされています。

(前略)しかし、今求められているのは、与えられた興味・関心でやる気になる段階から一歩進んで、粘り強く、主体的に学ぶ力です。学習目標を立てて、やる気がない時にでもやる気を出す方略を身につけることや、小さい目標の達成を繰り返して自分を鼓舞するといった「自己調整力型」の力と言われています。医学部生を例にとると、膨大な症例を頭に詰め込むことやドイツ語や英語を身に付けるのは楽しいことばかりではないと思いますが、将来の職業に必要なことから努力することが大切です(溝上 2024)。

溝上は、上記の資質・能力について、以前は、「大学以降でもいい」という考え方が高校側にもありましたが、高校までに高めておかないと大学入学以降に挽回するのが難しいという調査結果も報告しています(溝上 2024)。この溝上が説明する資質・能力は、仙台二高が伝統の中で、そして共学化以後の対応の中でも大事に育ててきたものであり、二高生が大学入学後、大学や社会に出て活躍しているのはその証左であると考えます。

日本の高校教育は、個別最適な学びと協働的な学びからなる「令和の日本型学校教育」を実現するために、現代の教育課題への対応

として、「多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学び」を目指しております。本校においては「令和の日本型学校教育」に示されていることをずっと以前からすでに高いレベルで実践してきました。これからも、「文武一道」そして「至誠業に励み 雄大剛健の風を養い」ともに敬愛切磋を怠らず」という伝統の中で、さらなる「学びの現代化」を目指していきます。

参考

- 東洋経済 education × ICT 『進学実績が光る東北の名門・仙台第二高校が進める「学びの現代化」とは 国公立大医学部医学科 合格者は公立高校トップ』2025年8月7日
- 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適の学びと、協働的な学びの実現～（答申）令和3年1月26日 中央教育審議会
- 高等学校等における多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びの実現について（通知）令和6年2月13日 文部科学省
- 文科省（2025）「学校安全の推進に関する有識者会議」審議のまとめ「学校安全の推進に関する組織体制の整備と地域等との連携について～複雑化・多様化する課題に対応するための、実効的・持続的で安全・安心な学校づくりに向けて～」について 2025年（令和7年）3月3日
- 近田政博（2024）『改訂版 学びのティップス 大学で鍛える思考法』玉川大学出版部
- 溝上慎一（2024）高校までに「自己調整力」を 毎日新聞 教育の森 2024年4月29日
- ◎最新の研究成果は、
- 「教師の自発的なメンタリングはどのようにして実現し、促されるか？」『質的心理学研究』2023年22巻1号（日本質的心理学編）。
- 大学入試学会第1回研究大会口頭発表 大学入試学会第1回大会発表予稿集 2024年9月 大学入試学会
- ◎今年度は、東北大学全学教育科目「教職論」担当